

共に歩ける未来の為に

大田市立第一中学校 三年 古谷夢叶

「なぜ、同じ人間なのに、障がい者と健常者は違う人間だと思われているのか」

私はある日、叔父と街を歩いていてふとこんなことを思いました。

私には生まれつき両足が悪く身体障がい者の叔父がいます。身体障がい者といっても歩行が難しく常に杖をついている状態なだけで他は私と何一つ変わったところはありません。私が幼少期の頃からずっと優しく、可愛がってくれて父親のいない私からすると父親のような存在で頼りになる叔父で、障がいがあることを特別に意識したことは一度もありませんでした。が、街を一緒に歩くとき周囲の視線は必ずと言っていいほど、叔父に集まります。その視線は一瞬のものもあれば、長くじっと見つめてくる人もいてナイフのような鋭さ、冷たさを感じます。私はそういった視線を受けるたびに、心がざわつき、悔しさのような切なさのような苦しい気持ちになります。叔父は視線を全く気にしていないふりをしていますが、心の奥では傷ついて泣いているのかもしれないかもしれません。でもいつも明るく笑って冗談を言って私がしんどい時も笑わせてくれるそんな叔父を見ると怒りがこみ上げてきます。

人はだれしも違いを持っています。容姿や性格、話し方、体の状態など人それぞれ違いがあることは当たり前のことで自分と全く同じ人間などは居るはずがないのです。その違いに対して過剰に注目したり特別視をするのは違うと思います。そのちょっとした言動が相手にとってどれほどの重りになるのか考えたことはありますか。一時期、私は周囲の視線を浴びるのが怖く一緒に外出をすることを拒んだ時期がありました。そんな時、母から「おっちゃんは神様から認められたんだよ。試練を乗り越えられる人だと思われたから与えられたんだよ」と言われ納得しました。なぜなら叔父は一切私たち家族に助けを求めたりしたことなどないのです。声をかけても自分で試行錯誤をし、どんな壁も乗り越えていて辛いはずなのに、より深く考えるようになりました。私は過去の自分を憎みました。

中学三年生で教わる公民では人権について深く取り上げられているはずです。憲法で定められており、人権とは、すべての人間が「人間として」「人らしく」生きるために、誰しもが生まれながらにして持っている権利です。障がいがある人もない人も、同じ人間であることには変わりありません。それにも関わらず、街で叔父に向けられる視線は人権を侵害する行為だと私は思います。見た目や自分との違いに一点を集中させ、とらわれるのではなくその人を一人の人間としてありのままの個性を理解して尊重することが必要です。

私はもう周りの人の視線を気にして叔父との外出を避けるような自分ではいたくありません。むしろ、自分から堂々と叔父と歩き、人々に、世の中に、身近にこういう人間もいるんだよと伝えていきたいです。その姿が少しでも障がいに対して偏見を持っている人の意識を変えるきっかけになるかもしれないと思ったからです。